

東海道五十三次

てくてく歩く日帰り一人旅

太田康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その⑥

府中宿に見るべきものは他に何もなかった。曲がりくねった道に迷わぬよう、細心の注意を払って旧東海道を辿るだけで、やがて安部川に出た。橋の手前左側に、名物安部川餅の老舗「石部屋」がある。「元祖安部川餅 創業文化元年」の赤看板に平仮名で「せきべや」と書かれてあった。五十三次に石部宿^{いしべ}があり、それが私の郷里^{みほくち}の水口宿のお隣りときてはこの平仮名なしには、逆立ちしても「せきべや」とは読めなかった。

安部川橋を渡った辺りが間の宿の手越宿。その後国道1号と合流。その先、佐渡交差点で国道から左にそれる。しばらく行くと一里塚。ここを過ぎると次第に山あいの霧囲気になり、丸子川に沿う道となる辺りからが、かつての丸子宿（20番目）。やがて左折して丸子橋を渡る手前に丁子屋。



(歌川広重 鞠子宿)

丸子と言えば名物「とろろ汁」。とろろ汁と言えば丁子屋。広重の絵から抜け出して来たような、郷愁を誘う茅葺の古い店構えである。慶長元年（1596）創業の400年以上も、旅人にとろろ汁を提供してきたお店。店の前には「十返舎一九膝栗毛」の碑や、芭蕉句碑「梅わかな丸子の宿のとろろ汁」が建っている。

『東海道中膝栗毛』のここでの一九の筆（夫婦喧嘩のとばっちりでとろろ汁にありつけなかった話）は冴えている。一九の生誕地はお隣りの府中宿で、この辺りの地理に詳しかったせいもあると思う。芭蕉句には梅（春）、若菜（新年）、とろろ汁（秋）と異なる3つの季語が入っているが、ここでは「とろろ汁」。好事家は句成立の事情を調べてみては。

丸子宿で発見した知られざる穴場は、「日本の紅茶発祥の地 丸子紅茶」の案内板と幟を見つけたこと。明治の初め元幕臣の多田元吉がこの地を開墾して茶を植え、茶の研究のためインドに渡り、紅茶の製造技術を習得。持ち帰った苗を植えたのが始まりとか。

その後、街道は国道1号と合流したり分かれたりを繰り返しながら「平成の宇津ノ谷トンネル」

に差し掛かる。ここには他に明治のトンネル、大正のトンネル、昭和のトンネルがあり、それらの上に旧東海道宇津ノ谷峠がある。この峠の上り下りだけで1日かかる。

この旧道を辿ると峠の手前に宇津ノ谷の集落が見えてくる。家々には当時の屋号が付されていて、例えば秀吉から褒美に賜ったと伝えられる陣羽織を展示しているのが「お羽織屋」。

隣の慶竜寺には蕉門十哲の一人、森川許六の「十団とおだこ子も小粒となりぬ秋の風」の句碑が建つ。軽味の風趣を生かした句と芭蕉に賞賛されたいが、実際は小粒の背景に伝説（長くなるので略）が踏まられていて、当時の小粒ぶりは今となっては確かめようがない。慶竜寺の委託を受けてお羽織屋で販売していると聞き、立ち寄ったが生憎品切れ。見本を見せて買ったが、2個ずつ5色入りの堂々たる大きさ。この後、峠を越えて曲がりくねった道を下りると、鶯の細道公園。峠越えの旧道は東海道以外に在原業平ゆかりの「鶯の細道」があり、そちらの名を冠したもの。さらに下ると延命地藏を経て、平成のトンネルを抜けて来た国道1号と合流。そのまま川沿いに進むとまもなく岡部宿（21番目）である。



(歌川広重 岡部宿)

ここでは国道1号と県道と旧東海道が分かれたり合流したりで、分かりにくいこともあってほと

んど遺跡らしいものに出会えなかったので、目にしたもののみを拾い上げてみる。「これより岡部宿」の看板を見て間もなく、「十石坂観音堂」が道の右側の高台に。石仏が多くある所。ついでバス停「岡部役場前」の脇に、「五知如来像」。田中城主の姫君の口を利けるようにした伝説の石仏五体。誓願寺が廃寺となり此処に移設。その後、「東海道岡部宿の松並木」と道標。最後に東へ向けて歩く人のための「これより東海道岡部宿」の碑。

次いで藤枝宿（22番目）。岡部宿と同じく東海道の遺跡は殆どなく、宿場の気配が感じられない街のたたずまいであった。だから目にした、遺跡とは違う興味深いものを取り上げてみる。まず田中城址に、「月の砂漠」の歌詞を刻んだ碑。作詞者加藤まさとがこの地の出身者だからで、蓮華寺池畔の郷土博物館の入口にも、駱駝に乗った王子様とお姫様の2人像が建っていた。さらに街道筋には、平敦盛を討ち取った熊谷次郎直実が、法然上人に弟子入りして出家後、自ら建立した熊谷山蓮生寺も残っていた。「蓮生」は師の法然から貰った出家名であるにもかかわらず、なぜか今では浄土真宗のお寺に鞍替えしていた。



(歌川広重 藤枝宿)

この宿でのもう1つの収穫は、創業170年余の伝統を継ぐ藤枝達磨の屋号を持つお店があり、ハ

フカデオ・ハーンこと小泉八雲との関わりを知り得たこと。東海道を日帰りで繋いで歩いてるといふ私の言に、職人氣質の5代目当主が心を開いてくれて、次のような貴重な話を伺うことが出来た。何でもこの店の3代目が考案した張子だるまを、焼津の魚屋の山口乙吉なる人物が朝な夕な拝んでいるのを、乙吉の家に逗留していた八雲が目にし、だるまに願掛けをして目入れをする日本の風習を知ることになった。自身も16歳の時左目を失明して、目が不自由な八雲はいたく感動して、『乙吉の達磨』という小説を書いた由。今もお店に置かれている当主作の、八雲達磨を記念に購入した。八雲と漱石の浅からぬ因縁については、筆を改めて詳述したいが、戦後、「老いらくの恋」で名を馳せた歌人川田順や、熊本五高校長であった初代講道館館長加納治五郎までも関わりは及び、興味津々。

「越すに越されぬ大井川」と箱根馬子唄にある、東海道最大の難所を擁するのが島田宿（23番目）。JR島田駅前には、「さみだれの空吹きおとせ大井川」の芭蕉さみだれ古碑が建つ。駅前から西へ約1.5キロ進むと、往時をしのばせる家並みが出現。「国指定島田宿大井川川越遺跡街並」である。街並みの取り掛かりは口取宿。次いで番宿、川会所、札場、荷縄屋、仲間の宿、立会宿等々。その内の番宿は川越人足の詰め所で、人足は10組に分けられ、1～10番宿があった。4、7、8番以外は現存し、3番、10番が見学

施設として公開されている。何百人もの川越人足を中心に、いかに多くの人々の分業によって川越制度が支えられていたか、その一端を垣間見ることが出来た。天竜川のように渡船制度に移行することが出来なかったのは、何千人もを路頭に迷わすことになるからであろう。



（歌川広重 島田宿）

他に島田市には、平成9年にギネスブックに登録された世界一長い木造の橋がある。明治2年、最後の将軍慶喜を護衛して来た幕臣たちが大井川右岸にある牧之原を開拓し茶畑を作り始めたが、島田との往復を小舟で渡るのは不便なため着工し、10年かけて完成させた橋。蓬莱橋と言ひ、全長897.22メートル。語呂合わせは“厄なし夫婦”とか。歴史的役割を終えた今では渡橋料100円の、渡って引き返すだけの観光用の橋として生き残っている。川の大きな蛇行により、川越遺跡とはほぼ真逆の東へ歩いて1.5キロの所にある。